

平成 30 年 5 月 17 日現在

機関番号：21201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370731

研究課題名(和文)教科書の誤りをとおして検証する日本ロシア語教育の特殊性

研究課題名(英文)The specific aspects of Japanese textbook of russian language

研究代表者

黒岩 幸子(Kuroiwa, Yukiko)

岩手県立大学・私立大学の部局等・教授

研究者番号：80305317

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：口蓋化音と非口蓋化音の区別を意味する音声の硬軟は子音だけに存在するが、日本のロシア語教科書の多くは現在も「硬母音」と「軟母音」という概念を用いている。この誤った概念がいつどこで発生して日本に定着したのか、なぜ今まで訂正されないのか、言語学的に正しく、かつ学習者に理解しやすいロシア語発音教程はどのようなものか。これらを解明して提示したことが、本研究の成果である。日本にロシア語教育が導入された明治期に遡って文献で検証し、その成果をもとにしたロシア語講座をNHKラジオで実践した。

研究成果の概要(英文)：A number of Japanese textbook of russian language use the incorrect concept "hard and soft vowels", though only consonants have difference of hard or soft. This research showed the origin and fixation of "hard and soft vowels" in Japanese textbook and analyzed why this incorrect explanation has not be corrected more than 100 years. This research also carried out in practice how to show learners relationship between sounds and letters without using the concept "hard and soft vowels".

研究分野：ロシア語教育

キーワード：ロシア語教育 ロシア語教科書 ロシア語発音教程

1. 研究開始当初の背景

報告者は、自身のロシア語教育の現場や日本ロシア語教育研究会等で種々のロシア語教科書を検討する機会を持ち、日本の教科書の文字と発音の解説に不正確な記述の多いことに気づいた。特に文字と発音の説明において、子音にしか存在しない硬軟(非口蓋化と口蓋化)の区別が母音にも使われており、「硬母音」と「軟母音」と名づけられていることに違和感を覚えた。かかる誤りの起源と定着、なぜ訂正されないかの理由を明らかにし、今後のロシア語発音教程、さらにはロシア語教育のあり方を再検討すべきと考えた。

2. 研究の目的

日本のロシア語教科書における「硬軟母音」という誤った概念の起源を突き止め、なぜその誤りが矯正されずに定着したのかを明らかにすること。ロシア語の文字と発音に関する正確な記述方法を提案するとともに、今後のロシア語教育の改善策について教科書批判を含めて発信すること。

3. 研究の方法

(1) 現在のロシア語教育の現場で広く使用されているロシア語教科書及び参考書の「硬軟母音」の使用状況を把握した。

(2) ロシア語教育が日本に導入された明治期まで遡って「硬軟母音」の起源を探し、定着のプロセスを検証した。19世紀末から20世紀初頭、第一次世界大戦から第二次世界大戦勃発まで、第二次世界大戦後から1950年代までの三時代に区切り、本格的な日本のロシア語教科書の編纂プロセスと発音説明の変遷をたどった。明治、大正、昭和期のロシア語教科書は、東京外国語大学などの主な大学図書館に所蔵されており、それらを当たっていくことで大きな流れがつかめた。また、日本ロシア文学会編纂『日本人とロシア語』の第VI章「ロシア語学関係書分類目録」を手がかりとして必要な

文献を探し出した。

日本のロシア語教科書が本格的に編纂された時期のロシア語教育・学習環境の特殊な状況については、東京外国語学校、陸軍幼年学校(東京・大阪・仙台・広島)、哈爾濱学院でのロシア語教育の環境を調査することによって明らかになった。

(3) 日本での文献調査のほかに、国際学会等で報告するなど、海外の研究者との意見交換によって新たな情報を得た。特に、ICCEES(International Council for Central and East European Studies)、MAPRYAL(国際ロシア語ロシア文学教育者協会)集まったロシアおよび旧ソ連圏や旧東欧圏のロシア語教育従事者から、彼らの教育現場での発音教授法に関する知見を得ることが出来た。ここからロシアにおけるロシア語教育、また外国人のためのロシア語教育の歴史をたどり、日本におけるロシア語教育との差異を明らかにすることができた。

(4) 「硬軟母音」を使わないロシア語発音教程を提示、実践する。研究成果を論文にするだけでなく、新たなロシア語発音教程を教育現場で実践することを最後のステップとした。

4. 研究成果

(1) 日本における「硬軟母音」の起源は、日本初の本格的なロシア語教科書として長く使用されてきたグレーボフ編纂『露西亜文法』(岩澤丙吉譯、丸善、1898年)にあることがわかった。ロシア公使館付きの司祭であったグレーボフをはじめとして、日本のロシア語教育は、言語学や外国語教育の専門家ではない外国人によって始められた。布教目的で入ってきた宗教者が当該国の外国語教育の先達になる例は、世界に広く見られる現象である。

(2) グレーボフに次ぐ本格的な教科書は、八杉貞利『露西亜語学階梯』(大倉書店、

1916年)であり、同書の改訂版は戦後も『八杉ロシア語教本』(1961年)として復刊され、日本でもっとも権威あるロシア語教科書となった。その後も八杉の教え子たちによって「硬軟母音」は引き継がれていった。八杉は、日露戦争前にペテルブルグ大学に留学するが、留学途中で開戦となり帰国を余儀なくされた。日本のロシア語教育が、日本の近代化及び対外戦争準備期と重なること、その軍事的意味なども明らかになった。

(3) 現代ロシアの権威ある文法書であるソ連科学アカデミー『ロシア語文法』(モスクワ、1980年)に「硬軟母音」の記載はないが、20世紀初頭までロシアでも使用されていた。これについては、現代のロシアの言語学者たちもほとんど知らない。ロシアでは20世紀初めにボドアン・ド・クルトネやシチェルバなどのペテルブルグ大学を中心とする言語学者たちが、ロシアの学校教育から「硬軟母音」という誤った概念を排除していった。ペテルブルグの言語学者のこの過去の功績は、現代ロシアでは記憶されておらず、国際学会の報告ではロシア人研究者から驚きの声が上がった。

(4) 日本に「硬軟母音」が今なお残った理由として次が挙げられる。音声ではなく文字から始まった学習方法にとっては、母音字と合わせた便宜的な硬軟母音の概念が受け入れられやすい。八杉貞利の権威と影響力のもとで、彼の弟子たちが安易に恩師のスタイルを踏襲し続けた。現代日本のロシア語教育の主な担い手に、言語学に疎いロシア文学者が多いこと、またロシア語の初歩教育という地道な仕事の軽視が学会に根強いこと。

(5) ロシアでは廃された「硬軟母音」の概念を残した教科書は、日本だけでなく、旧ソ連や東欧諸国でも使われている。従って、外国語として文字と発音を同時に学ぶ

際には、この概念がそれなりに有用だと言えるのかもしれない。

(6) ロシア語教育の現場では、文法習得がもっとも困難と考えられ、発音にはあまり時間が割かれていない。今般のコミュニケーション能力の重視という趨勢からも、今後発音教程には力が入られるべきであろう。本研究を基にした研究発表等の場で、ロシア語発音教程の再考を提起したこと、ロシア語教科書の精査、批判もまた重要であることを注意喚起したことも成果の一つである。

(7) 研究成果を実践に反映させる場として、2017年4月から9月までNHKラジオのロシア語講座入門編を担当した。「硬軟母音」を使わずにロシア語の文字と発音の仕組みを説明する試みである。さらに研究を継続させて、今後のロシア語教育の現場で実践してゆきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

黒岩幸子 「日本のロシア語教程における「硬母音・軟母音」の概念について」『ロシア語教育研究』第6号、査読有、2015年、13-34頁。

黒岩幸子 「NHKラジオ「まいにちロシア語」担当の経験から」『ロシア語教育研究』第8号、査読有、2017年、53-67頁。

[学会発表](計5件)

黒岩幸子 「日本のロシア語教育における「硬・軟母音」という概念について」日本ロシア文学会東北支部、2014年7月、山形大学。

黒岩幸子 「ロシア語教程に「硬・軟母音」という概念は必要か」日本ロシア語教育研究会、2014年12月、慶応義塾大学日吉キャンパス。

Yukiko Kuroiwa “The origin and fixation of incorrect concept “hard and soft vowels” in Russian teaching in Japan

ICCEES IX World Congress, 2015 年 8 月、
神田外語大学。

黒岩幸子 「日本のロシア語教程における「硬・軟母音」の起源と定着について」
日本ロシア文学会第 65 回大会、2015 年 11
月、埼玉大学。

Юкико Куроива «Проблемы
обучения произношению в современных
японских учебниках русского языка»
МАПРЯЛ, 2016 年 5 月、ワルシャワ大学。

〔図書〕(計 8 件)

黒岩幸子「ロシア文学語学関連学会の
国際交流とネットワーク」砂岡和子・室井
禎之編著『日本発多言語国際情報発信の現
状と課題 ヒューマンリソースとグローバ
ルコミュニケーションのゆくえ』朝日出版
社、2016 年、55-72 頁。

Yukiko Kuroiwa “International
exchange among Japanese academic
associations of Russian language and
literature” Edited by Kazuko SUNAOKA
& Yoshiyuki MUROI. *The teaching of
foreign languages in Japan and
international academic activities*. ASAHI
PRESS, 2016, pp. 89-104.

～ 黒岩幸子「入門編 声に出して覚
えるロシア語」『NHK ラジオ まいにちロシ
ア語』4 月号～9 月号、NHK 出版、2017 年、
5-70 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒岩 幸子 (KUROIWA, Yukiko)

岩手県立大学・高等教育推進センター・
教授

研究者番号：80305317